

自然・環境グループ

自然・環境グループの質問を始めます。

私たちのグループは、希少な野生生物の保全、ゴミのポイ捨て、カキ殻の新たな再利用について話し合いました。

このことについて、3つの質問をしたいと思います。

質問1 希少な野生生物の保全について

広島県は、瀬戸内海から中国山地の山々まで、変化に富んだ自然と気候によって、多様な動植物が生息・生育しています。

一方で、県内に生息する野生生物1万5,314種のうち、オオサンショウウオなど野生生物約1,000種が、地球環境の変化などにより、絶滅のおそれがあり、希少な野生生物の保全が難しくなっています。

私は、学校でオオサンショウウオの学習を行う中で、河川の護岸工事などの開発により、生息が減少していることを知りました。こうした問題はオオサンショウウオだけでなく、広島県に生息する他の野生生物にも言えることだと思います。

そこで提案です。河川改修等を行う際に、オオサンショウウオが通れる道や魚道を整備するなど、生物の良好な生息環境を保全するための工夫をもっと行ってはどうでしょうか。

また、希少な野生生物の保全のためには、工事の配慮などに加えて、私たち一人一人が自然に興味・関心を持つことが必要だと思います。自然体験アクティビティなどを活用して、自然についてより知る取組を推進してはどうでしょうか。

私は修学旅行で、自然体験アクティビティのラフティングを楽しむ中で、自然に対して興味を持つことができました。授業の中で自然について学ぶことや、自然を身近に感じることで自然への関心が高まり、希少な野生生物の保全につながっていくと思います。

答弁（環境県民局長）

私たちの住む広島県は、雄大な中国山地、その山々を源とする大小の河川、瀬戸内海や美しい島々など、四季折々の自然が身近にあり、行政や県民の皆様が一体となっ

て、こうした豊かな自然環境を象徴する貴重な存在である野生生物の保全を図り、未来に引き継いでいく必要があると考えています。

まず、河川改修などにおける生物の生息環境の保全に関する取組についてお答えします。

広島県では、河川改修を計画する際には、事前に河川周辺に生息する動植物の調査を行っており、動植物の生息・生育の場となっている川の地形の保全・復元を図るなど、「多自然川づくり」といわれる野生生物にも配慮した整備を行うこととしております。

ご提案のありました魚道の整備につきましては、例えば、三原市を流れる沼田川では、「魚がのぼりやすい川づくり」としてアユの遡上に配慮した魚道の整備を行ってきたところです。

また、オオサンショウウオにつきましては、例えば、安芸高田市を流れる長瀬川では、護岸に巣穴を作るなど生息環境に配慮しているところです。

引き続き、多様な生物の生息・生育環境に配慮した川づくりを進めていきたいと考えています。

次に、自然体験アクティビティなどを活用して、自然についてより知る取組の推進についてお答えします。

県内の自然公園におきましては、廿日市市の吉和にあるもみのき森林公園の山林の地形を生かしたフォレストアドベンチャーや安芸太田町の三段峡や呉市下蒲刈町にある県民の浜でのカヤック体験など、県民の皆様が自然とふれあうためのアクティビティなどの機会を提供しているほか、自然観察会の開催などを通じ、希少な生物に関する環境学習や保護活動の促進に努めているところです。

また、児童生徒やその保護者の皆さまが、体験を通じて自然について学ぶ機会が充実するよう、自然環境や動植物などの専門的な知識のある講師を派遣したり、企業と連携して、森の散策や川の生き物観察などの子供向けの環境学習ツアーを行うなどの取組を行っています。

引き続き、関係者の皆様と協力して、希少な野生生物の保全により多くの方々が興味を持ち、配慮していただけるよう、自然についてより知るための取組を充実させていきたいと考えております。

質問2 ごみのポイ捨てについて

私の家の近くには芦田川がありますが、ごみのポイ捨てや不法投棄されているのを見かけます。芦田川は、最近の水質調査において、中国地方の河川の中でワースト3位以内が続くなど水質汚染が大きな問題になっています。

また、芦田川に限らず、河川のごみは水質汚染を引き起こすだけでなく、海に流れ込んで海洋プラスチックごみとなるものもあり、海洋生物の窒息死や景観悪化につながります。

そこで、1つ目の提案です。河川の清掃などを行っているボランティア団体、企業等に対して支援を行ってみるのはどうでしょうか。そうすることで、ごみのポイ捨ての問題に対して、県民の意識を高めることができると思います。

また、現在、海で分解されるレジ袋の開発が行われたり、プラスチック製のお菓子の袋を紙製に変えたりするなど、プラスチックごみを減らす動きがあります。このようにごみのポイ捨てがあっても自然への影響を抑える取組が大切だと思います。

そこで、2つ目の提案です。県が、企業等に対して自然への影響を抑えた製品の開発や使用を促進するための支援をしてはどうでしょうか。

県、県民、事業者が連携した取組によって、ごみのポイ捨てや海洋プラスチックごみの問題の解決を進めることで、美しく恵み豊かな瀬戸内海を守っていくことができると思います。

答弁（環境県民局長）

はじめに、1つ目の提案である、清掃活動を行うボランティア団体、企業等に対する支援についてお答えします。

ボランティア団体や企業による河川の清掃活動については、河川を適切に維持管理していく上で、非常に重要な取組であると考えています。

このため、広島県では、平成20年度に、住民や企業などの皆さんが、河川や道路の清掃や美化などを自主的に行い、わが子のように世話をする活動を支援する「広島県アダプト制度」を作り、現在では、約440団体、16,000人の方に登録していただいています。

支援の内容としては、活動に要する費用の一部を負担したり、怪我などに備えて保険をかけることなどを行っています。

また、青少年による清掃・美化活動の内容を地域住民の方や他のボランティア団体

に対して発表する場である青少年活動コンテストを開催し、新たな担い手の育成にも努めています。

ご提案を頂きましたボランティア団体や企業等に対する支援は、水質や景観などの河川環境を保全していく上で貴重なご意見であることから、引き続き、この制度の拡充や、より積極的なPR活動を進め、河川の美化やゴミのポイ捨て問題に対する県民の皆様の意識を高めていただけるよう取り組んでいきます。

次に、2つ目の提案である、自然への影響を抑えた製品の開発や使用を促進するための支援についてお答えします。

海に流れ出たプラスチックごみは自然界で分解されないことから、プラスチック製品について海で分解される素材や紙などの自然への影響を抑えた素材に切り替えていくことは、海洋プラスチックごみの問題の解決に大きく役立つものと考えています。

このため、広島県では、今年の6月に食品・飲料メーカーや素材メーカーなど、幅広い企業の皆様と一緒に海ごみ対策を考え、行動するための組織である「GREEN SEA瀬戸内・ひろしまプラットフォーム」を設立いたしました。

このプラットフォームに参画する企業や団体も60を超えるなど、順次増えてきており、専門家の方々の助言もいただきながら、技術やアイデアを持ち寄り、海で分解するプラスチック製品の開発や紙など別の素材で作った製品への切替えに取り組んでいるところです。

また、こうした製品の使用を進めていくためには、多くの消費者の皆様にも製品の意義を理解し、繰り返し購入してもらうことが大切であると考えており、マスコミや消費者団体の協力もいただきながら、啓発活動や情報発信を強化していきます。

このような取組を進めることにより、2030年までにペットボトル、プラスチックボトル、食品包装・レジ袋の3品目について重点的な使用量削減の仕組みを構築し、2040年までに3品目の新たな流出をゼロにした上で、2050年までに全てのプラスチックごみの新たな流出ゼロを目指していきます。

引き続き、美しく恵み豊かな瀬戸内海を守っていくため、事業者や県民の皆様と一緒に、海洋プラスチックごみ問題の解決に取り組んでいきます。

質問3 カキ殻の新たな再利用について

広島県の特産物であるカキは、全国第1位の生産量を誇っています。しかし、広島県で多く生産されているのは、殻付きカキではなく、カキ打ち場でむき身にしたカキ

であるため、多くのカキ殻を処分しなければいけません。

カキ殻の処理に当たっては、海中に溜めて有機物を分解した後、カキ殻処理業者により鶏などの飼料や畑の土壌改良剤として加工されるなど、再利用されているようですが、飼料の需要が低くなっている現状もあります。

限りある資源を有効に活用するためにも、カキ殻の新たな利用方法を考えていく必要があると思います。

そこで1つ目の提案です。カキ殻を使用した特産品を作ってはどうか。例えば、岡山県では民間企業が主体となって、瀬戸内海で育ったカキ殻を使って土壌改良した田んぼで採れるブランド米を売り出すプロジェクトがあり、広島県でも同様の取組が行えるのではないかと考えました。さらに、こうした方法による酒米で、広島県の日本酒をつくることにより、SDGsを意識した広島県ブランドとして新たに売り出すことができるのではないのでしょうか。そうすることで、広島県の新たな特産品として観光資源の創出につながると思います。

次に、2つ目の提案です。カキ殻を利用した新たな製品ができるよう、大学や企業等に対して開発支援を行ってはどうか。例えば、バイオマスプラスチックを製品として開発することができれば、廃棄物として燃焼したときに、バイオマスの持つ特性から大気中の二酸化炭素を増加させず、地球温暖化の防止につながると思います。

こうした支援により、企業等でカキ殻等、廃棄物だった資源の開発が進むことで、資源の有効活用が期待できると思います。

答弁（農林水産局長）

まず、一つ目の提案である、カキ殻を使用した特産品についてお答えいたします。

広島県では、カキ養殖に伴って、年間約10万トンのカキ殻が発生しており、県内2か所の処理工場において、乾燥や粉碎などの工程を経て、鶏の餌や、海の魚を増やすための魚礁、魚礁とは海の中で魚のすみかとなるところです。その材料、ニシキゴイ養殖池における水質改良剤など、様々な製品にリサイクルされています。

特に、カキ殻には、カルシウムが豊富でミネラルなども含まれるため、農業の分野におきましては、様々な農作物の土づくりに利用されています。

例えば、東広島市におきましては、生産者が、JAや市と連携し、カキ殻を使って米の品質を向上させることにより、ブランド化を図る取組を、今年から始めたところ

です。

また、カキ殻を酒米作りに活用することにつきましては、全国でも有名な広島のお酒と全国一の生産量を誇るカキを掛け合わせることで、ブランド価値をさらに向上させることができるよいアイデアだと思います。

このようなアイデアを生かし、その他の農作物につきましても広島ならではのブランディングについて検討していきたいと考えています。

次に、2つ目の提案である、カキ殻を利用した新たな製品ができるよう大学や企業などに対して開発支援を行うことについてお答えします。

広島県では、リサイクルや廃棄物を減量化したり、処理したりする技術開発を進めるため、大学や研究機関と連携して研究開発に取り組む企業に対し、補助金による支援を行っています。

カキ殻の新たな利用の研究については、これまでに9件の研究開発が行われており、うち、3件が商品化されています。

商品化された3件を、具体的に申し上げますと、交通事故などで道路に漏れた油などを吸着させて回収するための吸着材、部屋の壁を塗るための塗料、調理器具や食器などの洗浄・除菌剤で、身近なホームセンターで販売されている製品もあります。

県としましては、引き続き、カキ殻を含め資源のリサイクルに関する研究開発を行う企業などを積極的に支援し、資源の有効活用が促進されるよう取り組んでいきます。

また、資源の有効活用のためには、商品の開発だけでなく、商品を購入する消費者の皆様が、環境に与える影響を理解し、リサイクルなどの環境にやさしい商品を選ぶことも大切ですので、子供議員の皆様をはじめとする若い世代や保護者の皆様など、幅広い方々が、このような商品を積極的に選んでいただけるよう県としても情報発信に努めてまいります。